

関わる記録は残りやすいはずである。吉備池廃寺を、史料上の寺院の中に求めうる可能性は高い。

そこで、有力な候補として浮上してくるのが、百済大寺^{くだらのおおでら}である。この寺は、『日本書紀』と『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下『縁起』）が、ともに舒明11年（639）の発願と伝える、日本最初の勅願寺であった。寺地の移転を伴う複雑な沿革をたどるが、その法燈は、高市大寺・大官大寺を経て、今の大安寺に伝わる。

百済大寺の所在については、現在の広陵町百済周辺に比定するのが通説だが、この一帯で、それに該当する遺構や瓦の出土は全く知られていない。一方、香久山の西北麓一帯に百済大寺を比定する見解もあり（和田萃「百済宮再考」『季刊明日香風』第12号 1984年ほか）、木之本廃寺はその有力な候補となっていた。従来から、木之本廃寺の軒瓦（＝吉備池廃寺の軒瓦）については、百済大寺のものとする見解が有力だったのである（山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』1983年、大脇潔『飛鳥の寺』1989年ほか）。

軒瓦から見た吉備池廃寺の年代は、まさしく百済大寺の年代と合致する。というより、現状で、百済大寺の瓦はこれ以外に求めがたいのである。この軒瓦を出土する遺跡は、いずれも、今まで寺院跡としての明証を欠いていたが、それが遺構として、しかも並外れた規模のものと確認された以上、吉備池廃寺を百済大寺と見る説は、考古学的にかなりの説得力をもつといってよい。

また『縁起』によれば、百済大寺は、天武2年（673）に高市の地に移建され、高市大寺となった。『日本書紀』

も同年の造高市大寺司任命を伝えている。そして、これらも、吉備池廃寺が短期間のうちに他へ移転したという知見と符合するのである。

なお、その場合、吉備池廃寺と同範の軒瓦を出土する木之本廃寺は、高市大寺の有力候補となる。木之本廃寺を百済大寺に比定すると、その近辺に求めざるをえない高市大寺とが、あまりに近接した位置関係となってしまう。あえて移転する意味があったとは思われない。また、木之本廃寺周辺は、十市郡と高市郡の郡界が錯綜しており、古代にいずれに属したか即断できないが、吉備池廃寺の地が一貫して十市郡に属したことは、ほぼ疑いない。吉備池廃寺を高市大寺にあてるのは困難である。

このほかにも、吉備池廃寺の周辺には、「カウベ」や「コヲベ」「高部」といった地名があり（樫考研編『大和国条里復原図』1980年）、『縁起』や『日本三代実録』の記事から百済大寺近傍にあったとみられる「子部社」「子部大神」との関連をうかがわせる。また、金堂の南方では、過去の発掘で旧河道を検出しており（前園実知雄「橋本冠名遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1984年度』1985年）、『日本書紀』『縁起』がともに百済大寺の所在を「百済川の側」と伝える記事との関係も注意される。

以上のことから、なお問題とすべき点は少なくないが、吉備池廃寺が百済大寺である蓋然性は、きわめて高いと考える。史料との整合性をはじめ、残された課題については、伽藍全体の解明とともに今後の解決に委ね、ここでは、ひとまず吉備池廃寺を百済大寺にあてる仮説を提示しておくことにしたい。（小澤 毅／史料 瓦；佐川）

表8 その他の発掘調査概要

次 数	地 区	概 要
藤原宮78-10	藤原宮西面外濠	外濠の一部とみられる青灰色粘土と微砂層の互層を確認。
" 81	藤原宮右京一条一坊	坪内の東西道路や小規模建物群、井戸などを検出。工房関係の遺物も出土した。
" 81-2	藤原宮東方官衙南地区	丸太と石で護岸した南北溝1、井戸1、土坑2など江戸時代の遺構を検出。
" 81-3	藤原宮西方官衙南地区	中世の細溝、土坑など検出。藤原宮期の遺構なし。
" 81-4	藤原宮西方官衙南地区	中世の細溝を検出。藤原宮期の遺構なし。
" 81-5	藤原宮右京五条三坊	中・近世の細溝を多数検出。一部掘り下げ、藤原宮期の包含層や、7世紀代の細溝などを確認。
" 81-9	奥山久米寺東方	河川による堆積を確認。顕著な遺構なし。
" 81-10	藤原宮東方官衙北地区	地表下約0.65mで、12世紀後半の南北溝2と円形土坑2を検出。藤原宮期の遺構は不明。
" 81-11	藤原宮左京六条三坊	香久山西麓の低地で、沼状堆積を確認。「埴安池」と関連するか。
" 81-12	藤原宮東方官衙南地区	近世以降の土坑2、溝1などを検出。藤原宮期の遺構面は削平されている。
" 81-13	藤原宮左京七条三坊	古代の土坑1、14世紀代の瓦器をとまう土坑6などを検出。
" 81-15	藤原宮左京六条三坊	藤原宮期の柱穴2などの検出。
飛鳥寺1996-2	飛鳥寺東南部	中・近世の土坑数基を検出。飛鳥寺所用瓦も出土。
石神遺跡1996-1	石神遺跡	顕著な遺構なし。